

# 幼児の身体活動と体力・運動能力との関係

## The relationship between physical activities and motor abilities among young children.

高原 和子・角 南良幸・瀧 信子\*  
Kazuko Takahara・Yoshiyuki Sunami・Nobuko Taki\*

キーワード：幼児，体力・運動能力，運動遊び，身体活動量

### はじめに

幼児期は心身の発達の基礎ができる重要な時期である。そのため、幼児期における運動（身体活動）は、より良い心身の発達を促すために不可欠であり、日々、環境と関わる中で遊びをとおして十分にからだを動かすことが重要となる。

我々は、これまで保育所・幼稚園等の保育現場において、幼児の体力・運動能力について調査を実施してきた。それら先行研究から、保育者主導の保育実践だけでなく、幼児の自主性に任せた自由な運動遊びの中にこそ、体力・運動能力を向上させる鍵があることを確認してきており、保育現場においては、自由遊びの過ごし方の工夫と保育者の十分な環境構成の必要性を示唆している。

また、在園中の身体活動量と体力・運動能力との関係を調べた結果では、統計的な有意差は認められなかったものの、体力・運動能力の低い幼児に比べ高い幼児の方に身体活動量が多い傾向が認められた。一方、保育者とのヒヤリングの中で、運動遊びを好む子

（運動する子）と好まない子（運動しない子）の存在が報告され、体力・運動能力が優れている幼児は、普段から活発に動く傾向にあるという経験的な意見も多く寄せられた。

これらのことから、日常の身体活動量が体力・運動能力に少なからず影響していることは間違いない。

そこで、本研究では先行研究では測定できなかった休日や家庭での活動状況も含めた一日（24時間）の身体活動量を調査し、幼児の身体活動と体力・運動能力との関係について検討した。

### 方 法

#### 1. 対象

対象は、福岡県 K 市の Y 保育所に通う年中および年長児39名（男児15名，女児24名）である。対象児の主な身体的特性を表 1 に示す。

#### 2. 調査期間と運動遊び実施への配慮

調査期間は2014年11月から2015年2月である。この間、保育所においては、自由時間を中心に幼児が自主

表 1 対象の身体的特性

	年齢	身長	体重
男児	5歳11か月 (4歳11か月-6歳9か月)	113.0±6.63cm	20.5±4.05kg
女児	5歳10か月 (4歳10か月-6歳8か月)	108.4±6.38cm	18.3±2.32kg

Mean±SD

\*福岡こども短期大学

的・自発的に運動遊びを実施できるよう環境を整え、配慮した。

### 3. 体力・運動能力の測定

調査期間の前後（2014年11月と2015年2月）に体力・運動能力の測定を行った。測定項目は、汎用性が高く、幼児期運動指針<sup>1)</sup>でも用いられている東京教育大学心理学研究室作成の幼児運動能力検査<sup>2)</sup>から25m走、ソフトボール投げ、立ち幅跳び、両足連続跳び越し、体支持持続時間の5種目と、バランス能力および調整力をみるための開眼片足立ちの計6種目である。

測定方法は、25m走、ソフトボール投げ、立ち幅跳び、両足連続跳び越し、体支持持続時間については、東京教育大学体育心理学教室作成の幼児運動能力検査方法<sup>2)</sup>に準じて行い、開眼片足立ちは、文科省新体力テスト<sup>3)</sup>に準じて測定した。

### 4. 身体活動量の測定

2015年1月19日の登園時から2月2日の登園時まで加速度計（ライフコーダ:LC, スズケン社製）を就寝中と入浴中、また活動に支障を来す場合を除き24時間装着し、歩数および活動強度（LC強度）を測定した。LC強度は0～9で記録され、塩見ら<sup>4)</sup>の方法に準じてLC強度0～0.5：安静～微少運動、LC強度1～6：ゆっくり歩行～通常歩行、LC強度7～9：小走り～かけっことして区分した。

### 5. 体力・運動能力による群分け（上位群および下位群の抽出）

体力・運動能力の高低と身体活動状況との関係を検討するため、年長児を対象に2014年11月の体力・運動能力の総合評点をもとに男女児別に総合評点の上位群と下位群に分けた。

評定は、体力・運動能力測定項目の中の5種目（25m走、ソフトボール投げ、立ち幅跳び、両足連続跳び越

し、体支持持続時間）を森ら<sup>5)</sup>の基準表に基づいて評価し、その総合評点を算出した。上位群と下位群の群分けは、男女児別に総合評点の平均値を算出し、平均値を上回った者を上位群、下回った者を下位群とした。

上位群と下位群の身体的特性と総合評点の範囲を表2に示す。

### 6. 統計処理

対象児を性別で分け、体力・運動能力の平均値と標準偏差を算出した。調査期間前後の有意差検定は、対応のあるt検定を用い、体力・運動能力の変化量と身体活動状況との関係は、Pearsonの相関分析を用いて評価した。いずれも有意水準は危険率5%とした。

## 結 果

### 1. 体力・運動能力の前後の変化

調査前後の体力・運動能力測定の結果を表3に示す。男児ではソフトボール投げ、体支持持続時間、開眼片足立ちに、女児では両足連続跳び越し、体支持持続時間、開眼片足立ちに記録の伸びがみられた。中でも男児ではソフトボール投げ（前7.41±3.22m、後8.81±4.92m, p<0.05）、開眼片足立ち（前63.1±40.2秒、後107.6±58.2秒, p<0.01）に、女児では開眼片足立ち（前86.5±56.0秒、後130.0±50.1秒, p<0.01）に有意な好転が認められた。

### 2. 身体活動状況（歩数・LC強度）

加速度計による平日および休日の身体活動状況（平均歩数・平均LC強度）の結果を表4に示す。この結果から平日と休日とで身体活動状況に明かな違いがあることが判った。特に男児の歩数において顕著であった（平日15130.8±3414.3歩、休日9932.9±4116.4歩, p<0.01）。

表2 上位群と下位群の身体的特性および総合評点

		n	総合評点 (点)	年齢 (歳・か月)	身長 (cm)	体重 (kg)
男児	上位群	6	19-22	6歳4か月	118.6±2.76	22.0±2.16
	下位群	4	12-17	6歳3か月	114.1±7.29	22.7±5.72
女児	上位群	8	19-22	6歳4か月	115.0±3.31	20.5±1.63
	下位群	6	14-17	6歳3か月	106.6±7.40	18.8±2.25

Mean±SD

表 3 体力・運動能力の前後変化

男児		Mean±SD, Δ: 変化量, p: 有意水準 (*: 有意差あり)				
項目	n	前	後	Δ	記録	p
25m走 (秒)	15	6.01 ± 0.71	6.18 ± 0.67	0.17	↓	0.102
ソフトボール投げ (m)	15	7.41 ± 3.22	8.81 ± 4.92	1.40	↑	0.018 *
立ち幅跳び (cm)	15	135.3 ± 16.1	120.1 ± 18.3	-15.17	↓	0.002 *
両足連続跳び越し (秒)	15	4.77 ± 0.82	4.86 ± 0.97	0.09	↓	0.710
体支持持続時間 (秒)	15	48.9 ± 35.0	54.5 ± 33.6	5.60	↑	0.455
開眼片足立ち (秒)	15	63.1 ± 40.2	107.6 ± 58.2	44.50	↑	0.001 *

女児		Mean±SD, Δ: 変化量, p: 有意水準 (*: 有意差あり)				
項目	n	前	後	Δ	記録	p
25m走 (秒)	24	6.23 ± 0.57	6.47 ± 0.71	0.24	↓	0.044 *
ソフトボール投げ (m)	24	4.53 ± 1.37	4.53 ± 1.47	0.00	—	0.973
立ち幅跳び (cm)	24	119.0 ± 15.8	109.8 ± 16.9	-9.25	↓	0.000 *
両足連続跳び越し (秒)	24	4.72 ± 1.03	4.55 ± 0.73	-0.17	↑	0.207
体支持持続時間 (秒)	24	59.8 ± 35.6	66.6 ± 35.6	6.81	↑	0.314
開眼片足立ち (秒)	24	86.5 ± 56.0	130.0 ± 50.1	43.54	↑	0.000 *

↑: 記録の伸展, ↓: 記録の後退, —: 変化なし

表 4 平日および休日の身体活動状況

男児		Mean±SD, Δ: 平日と休日の差, p: 有意水準 (*: 有意差あり, §: 有意傾向)			
項目		平日	休日	Δ	p
歩数	(歩)	15130.8 ± 3414.3	9932.9 ± 4116.4	-5197.9	0.000 *
LC強度	0-0.5 (回)	19280.0 ± 499.0	20048.0 ± 647.2	768.0	0.000 *
LC強度	1-6 (回)	1929.9 ± 406.3	1364.2 ± 568.9	-565.7	0.001 *
LC強度	7-9 (回)	390.1 ± 141.1	187.8 ± 110.9	-202.3	0.000 *

女児		Mean±SD, Δ: 平日と休日の差, p: 有意水準 (*: 有意差あり, §: 有意傾向)			
項目		平日	休日	Δ	p
歩数	(歩)	12159.7 ± 2397.1	10665.9 ± 3966.6	-1493.8	0.050 §
LC強度	0-0.5 (回)	19713.2 ± 385.3	19996.0 ± 519.4	282.8	0.005 *
LC強度	1-6 (回)	1619.6 ± 350.5	1334.4 ± 393.6	-285.2	0.000 *
LC強度	7-9 (回)	267.2 ± 73.4	269.6 ± 162.0	2.4	0.942

LC強度 0-0.5: 安静~微少運動  
 LC強度 1-6: ゆっくり歩行~通常歩行に相当  
 LC強度 7-9: 小走り, かけっこに相当

### 3. 体力・運動能力の変化量と歩数およびLC強度との関係

体力・運動能力の変化量と歩数およびLC強度との関係を表5に示す。歩数では平日の歩数とソフトボール投げとの間に正の相関 ( $r=0.55, p<0.01$ ), 立ち幅跳びとの間に負の相関 ( $r=-0.41, p<0.05$ ) がみられた。

### 4. 体力・運動能力の上位群と下位群の比較

体力・運動能力について上位群と下位群とを比較した結果を表6に示す。その結果, 男女児ともに上位群と下位群に差が認められ, 特に女児において顕著で

あった。上位群と下位群との間に有意差が認められたのは, 男児で立ち幅跳び ( $P<0.01$ ) に, 女児で25m走 ( $P<0.01$ ), ソフトボール投げ ( $P<0.05$ ), 立ち幅跳び ( $P<0.05$ ), 体支持持続時間 ( $P<0.05$ ) であった。

### 5. 身体活動状況(歩数・LC強度)の上位群と下位群の比較

身体活動状況(歩数・LC強度)の上位群と下位群とを比較した結果を表7に示す。その結果, 男児において上位群と下位群との間に明かな違いが認められた。有意差が認められたのは, 平日の歩数 ( $P<0.05$ ), LC強度0-0.5 ( $P<0.05$ ), LC強度1-6 ( $P<0.05$ ),

表 5 体力・運動能力の変化量と歩数および LC 強度との関係

	平日				休日			
	歩数	LC強度 0-0.5	LC強度 1-6	LC強度 7-9	歩数	LC強度 0-0.5	LC強度 1-6	LC強度 7-9
25m走	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns
ソフトボール 投げ	** 0.55	** -0.55	** 0.52	** 0.43	ns	ns	ns	ns
立ち幅跳び	* -0.41	** 0.43	** -0.45	ns	ns	ns	ns	ns
両足連続 跳び越し	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns
体支持 持続時間	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns
開眼 片足立ち	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns

ns:相関なし \* : p<0.05 \*\* : p<0.01

表 6 体力・運動能力（初期値）の上位群・下位群比較

男児		Mean±SD, Δ : 差 (上位群-下位群), ρ : 有意水準			
項目	上位群 (n=6)	下位群 (n=4)	Δ	ρ	
25m走 (秒)	5.50 ± 0.20	6.31 ± 0.59	-0.81	0.067	
ソフトボール投げ (m)	9.41 ± 4.22	6.80 ± 1.64	2.61	0.214	
立ち幅跳び (cm)	152.2 ± 6.15	124.0 ± 3.16	28.16	0.000 *	
両足連続跳び越し (秒)	4.30 ± 0.32	5.29 ± 1.13	-0.99	0.177	
体支持持続時間 (秒)	52.5 ± 18.94	37.3 ± 36.49	15.25	0.484	

女児		Mean±SD, Δ : 差 (上位群-下位群), ρ : 有意水準			
項目	上位群 (n=8)	下位群 (n=6)	Δ	ρ	
25m走 (秒)	5.68 ± 0.39	6.60 ± 0.47	-0.93	0.003 *	
ソフトボール投げ (m)	5.74 ± 2.17	4.33 ± 0.86	1.41	0.021 *	
立ち幅跳び (cm)	132.0 ± 11.52	116.0 ± 18.84	16.00	0.027 *	
両足連続跳び越し (秒)	4.21 ± 0.40	4.58 ± 0.51	-0.37	0.199	
体支持持続時間 (秒)	37.7 ± 50.88	37.7 ± 8.98	-0.03	0.049 *	

\* : 有意差あり

表 7 身体活動状況（歩数・LC 強度）の上位群と下位群の比較

男児		Mean±SD, Δ : 差 (上位群-下位群), ρ : 有意水準			
項目		上位群 (n=6)	下位群 (n=4)	Δ	ρ
平日歩数	(歩)	18385.8 ± 1420.3	14652.4 ± 1883.9	3733.4	0.018 *
平日LC強度0-0.5	(回)	18815.2 ± 196.4	19351.3 ± 259.9	-536.2	0.016 *
平日LC強度1-6	(回)	2283.2 ± 166.2	1883.8 ± 215.7	399.4	0.024 *
平日LC強度7-9	(回)	501.6 ± 98.7	364.9 ± 146.6	136.8	0.165
休日歩数 (歩/日)	(回)	11613.9 ± 4273.1	6335.3 ± 3369.7	5278.7	0.063
休日LC強度0-0.5	(回)	19745.1 ± 671.1	20627.6 ± 412.8	-882.5	0.033 *
休日LC強度1-6	(回)	1675.1 ± 584.1	844.3 ± 268.2	830.8	0.018 *
休日LC強度7-9	(回)	179.8 ± 94.9	128.1 ± 149.9	51.7	0.569

女児		Mean±SD, Δ : 差 (上位群-下位群), ρ : 有意水準			
項目		上位群 (n=8)	下位群 (n=6)	Δ	ρ
平日歩数	(歩)	13493.4 ± 2209.6	13175.0 ± 2069.5	318.5	0.787
平日LC強度0-0.5	(回)	19517.8 ± 379.5	19525.9 ± 344.8	-8.1	0.967
平日LC強度1-6	(回)	1801.9 ± 318.4	1821.4 ± 332.9	-19.5	0.914
平日LC強度7-9	(回)	280.3 ± 87.4	252.7 ± 21.3	27.6	0.415
休日歩数 (歩/日)	(回)	11657.6 ± 5440.9	10936.8 ± 2410.5	720.8	0.745
休日LC強度0-0.5	(回)	19853.4 ± 683.7	19963.0 ± 380.4	-109.6	0.710
休日LC強度1-6	(回)	1446.9 ± 472.6	1390.2 ± 388.4	56.8	0.810
休日LC強度7-9	(回)	299.7 ± 230.3	246.8 ± 90.7	52.9	0.568

\* : 有意差あり

休日の LC 強度 0-0.5 ( $P < 0.05$ ), LC 強度 1-6 ( $P < 0.05$ ) であった。一方、女兒においては、どの項目にも有意差は認められなかった。

## 考 察

幼児の自発的なからだの動きをともなった遊び(運動遊び)の実践とその遊びの中で体験する多様な動きの経験は、幼児期においては必要不可欠で、将来の運動技能の獲得と体力向上および健康維持においてたいへん重要となる。その重要性を証明するために筆者らは、これまで幼児期の基本的運動技能の獲得と運動遊びを中心とした身体活動との関係を横断的および縦断的に調査し検討してきた<sup>6, 7, 8, 9, 10, 11)</sup>。

本研究では、先行研究で測定できなかった休日や家庭での身体活動状況を含めた一日(24時間)の幼児の身体活動状況を調査し、体力・運動能力との関係について明らかにすることを目的に調査した。

### 1. 体力・運動能力の前後の変化について

調査前後の体力・運動能力測定の変化では、記録の伸びがあった項目とそうでないものがみられた。以前より課題であった25m 走においては、今回も好転は認められなかった。さらに、これまで好転のみられた立ち幅跳びにおいては、男女児ともに明かな記録の後退が認められた。また、全体的に前年度に比べ、やや記録の伸び悩み傾向がみられた。これらの一因としては、特に今回は天候に恵まれず、園庭など活発にからだを動かすことのできる場所と機会が少なく、十分な活動ができなかったことが考えられた。加えて、今回は前年度まで行っていた「からだにこにこシート」を

使った積極的な取り組み<sup>9, 10, 11)</sup>を特に行わず、本来の幼児の自主性に任せた自由なものであった。そのため運動遊びに結びつける動機づけに欠けた内容であったことも影響したのではないかと考えられた。ただし、今回のようなケースが本来の保育現場のスタイルであることから、今後、幼児が自然とからだを動かしたくなるような何らかの工夫を考えていくことが必要である。特に、環境設定が重要であると考えられる。この点は今後の課題としたい。

### 2. 身体活動状況(歩数・LC 強度)について

加速度計による平日および休日の身体活動状況(平均歩数・平均 LC 強度)の結果から、平日と休日とでは身体活動状況に明かな違いがあることが確認できた。歩数においては、男女児ともに平日と休日との間に差が認められ、特に男児においては有意差( $p < 0.01$ )が認められた(図1)。保育所での生活が一日の大半を占める平日では、歩数からみても活発に動いていることが判る。

また、運動強度を示す LC 強度においても、平日と休日では明かな違いが認められた(図2)。小走り・かけっこに相当する高強度の LC 強度 7-9 では、女児において有意差は認められなかったが、男児においては有意な差( $p < 0.01$ )が認められ、中強度の LC 強度 1-6(歩行に相当)では男女児ともに有意な差が認められ( $p < 0.01$ )、いずれも平日が休日に比べ頻度回数が多かった。一方、安静〜微少運動に相当する LC 強度 0-0.5では休日の方が有意に頻度回数が多かった( $p < 0.01$ )。このことから、平日は強度の高い活発な活動を多く行っているが、休日は少ない、つまり、平日はダイナミックな活動を多く行い、幼児の

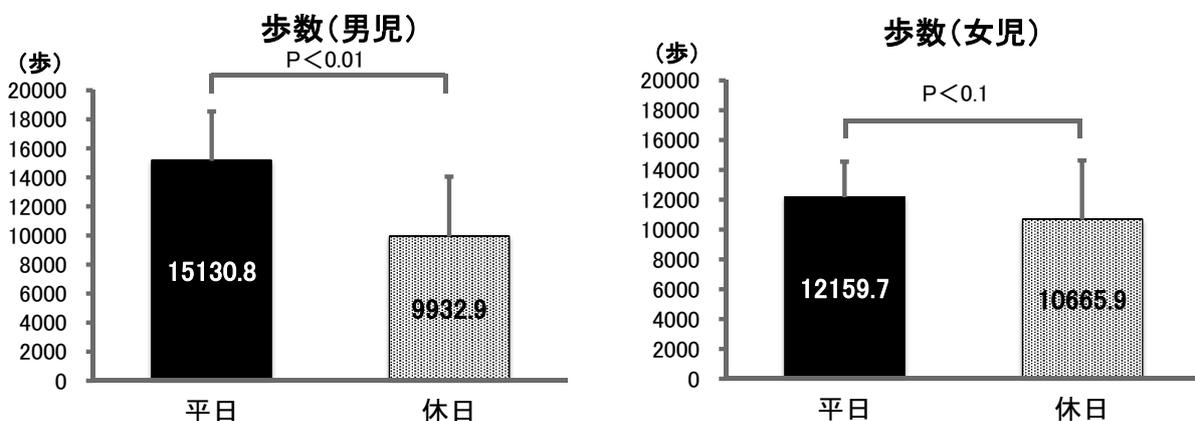


図1 歩数の平日と休日の比較

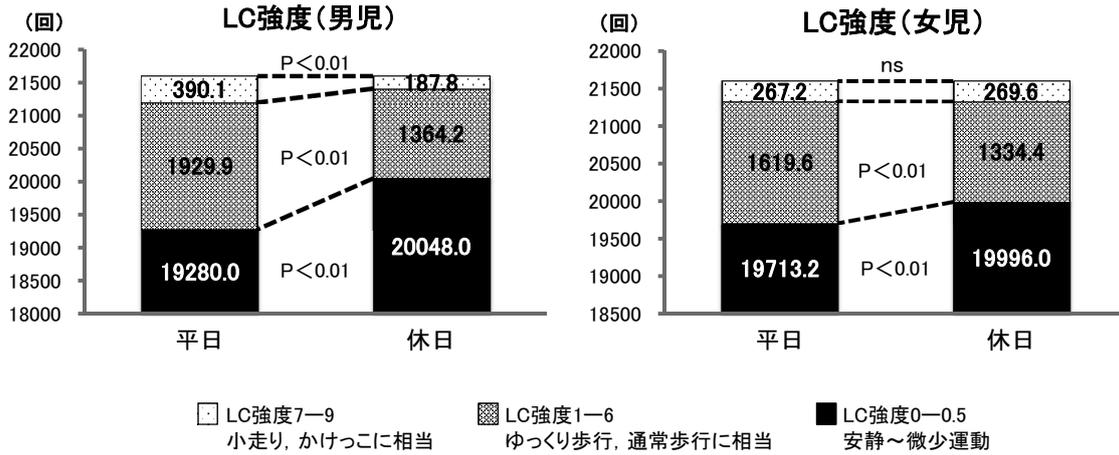


図2 LC強度の平日と休日の比較

体力・運動能力の向上に寄与していることが考えられるが、休日はあまり活動的ではないことがうかがえ、身体活動不足が推測される。これらの結果から、休日の過ごし方の見直しを、保護者とともに今一度考えていくべき課題であることが示唆された。

### 3. 体力・運動能力の変化量と歩数およびLC強度との関係について

体力・運動能力の変化量と歩数およびLC強度との関係においては、平日においてソフトボール投げと立ち幅跳びに関係が認められたが、その他の項目には関係が認められなかった。調査期間中の身体活動状況は、この期間の体力・運動能力の変化には大きく影響していなかった。日頃の身体活動状況が体力・運動能力へ影響を及ぼすには、ある程度の期間を要することは、これまでの調査でも示唆してきたが、今回の調査においても改めて確認された。

### 4. 体力・運動能力の高低(上位群と下位群)と身体活動状況について

今回、体力・運動能力と身体活動状況との関係を明らかにするために、調査前の体力・運動能力の結果(初期値)から、平均値より記録の高かった幼児(上位群)と低かった幼児(下位群)とにわけ、身体活動状況について群間比較を試みた。その結果、男児において上位群と下位群に明かな違いが認められた(表7)。その違いは平日ばかりか休日にもみられ、休日の身体活動状況が幼児の体力・運動能力に影響を及ぼすことが示唆された。

一方、女児においては明かな違いは認められなかった。男児と女児の日常の遊びのスタイルを観察すると、

男児は常にからだをダイナミックに動かす遊びに興じることが多い。それに比べて女児は、一つのことにじっくり取り組む遊びを好む傾向があり、動きの少ない遊びが多い。つまり、幼児においても遊びの質や量の性差がみられる。このことから、特に遊びの質の違いが身体活動状況に少なからず影響することは否めない。この件に関しては、今後、実際に幼児の遊びを直接観察するなどして明らかにしていきたい。

以上の結果から、日常の身体活動状況が幼児の体力・運動能力に影響を及ぼすことが明らかとなり、休日の過ごし方の影響も大きいことが示唆された。しかし、どのような過ごし方が幼児の体力・運動能力の改善に有効であるかは明らかにできておらず、引き続き、幼児の日常生活の過ごし方や保育所における環境構成の工夫について検討していく必要性が考えられた。

また、身体活動状況において男児と女児に違いがみられたことから、遊びの質や量の性差についても検討するなど、多角的に幼児期の体力・運動について検討、考察していきたい。

## まとめ

本研究では、幼児の身体活動状況を調査し、体力・運動能力との関係について検討した。その結果、以下の点が確認された。

- 1) 体力・運動能力の運動遊び実践前後の変化では、男児ではソフトボール投げ、体支持持続時間、開眼片足立ちに、女児では両足連続跳び越し、体支持持続時間、開眼片足立ちにおいて記録の伸びがみられ

た。しかし、課題である25m走については、好転は認められず、全体的にみてもやや伸び悩み傾向がみられた。その一因としては、天候による影響や昨年まで行っていたような積極的な取り組みを行わなかったことが影響したのではないかと考えられた。

- 2) 平日と休日とで身体活動状況に明かな違いがあることが判った。特に男児では顕著であった。保育所での生活が一日の大半を占める平日では、歩数からみても活発に動いていることが判った。また、運動強度を示すLC強度においても、平日と休日では明かな違いが認められた。平日はダイナミックな活動が多いことから、幼児の体力・運動能力の向上に寄与していることが考えられる。しかし、休日はあまり活動的ではないことがうかがえ、身体活動不足が推測された。
- 3) 初期値の体力・運動能力の上位群と下位群について身体活動状況の群間比較を試みた。その結果、男児において上位群と下位群に明かな違いが認められた。その違いは平日ばかりか休日にもみられ、休日の身体活動状況が幼児の体力・運動能力に影響を及ぼすことが示唆された。一方、女児においては明かな違いは認められなかった。幼児においても遊びの質や量の性差がみられることから、遊びの質の違いが身体活動状況に少なからず影響することが考えられた。

以上の結果から、日常の身体活動状況が幼児の体力・運動能力に影響を及ぼすことが明らかとなり、休日の過ごし方の影響も大きいことが示唆された。また、身体活動状況において男児と女児に違いが見られたことから、遊びの質や量の性差がみられることが考えられた。

## 参考・引用文献

- 1) 幼児期運動指針策定委員会：幼児期運動指針ガイドブック．文部科学省，2012.
- 2) 松田岩男，近藤充夫：幼児の運動能力に関する研究—幼児の運動能力発達基準の作成—．東京教育大学体育学部紀要，7，33-46，1968.
- 3) スポーツ・青少年局：新体力テスト実施要項．文部科学省，1998.
- 4) 塩見優子，角南良幸，沖島今日太，吉武裕，足立稔：加速度計を用いた幼児の日常生活における身体活動量についての研究．発育発達研究，39，1-6，2008.
- 5) 森司朗，杉原隆，吉田伊津美，筒井清次郎，鈴木康弘，中本浩輝，近藤充夫：2008年の全国調査からみた幼児の運動能力．体育の科学，60，56-66，2010.
- 6) 高原和子，角南良幸，蒲池知佳子：保育所における取り組みと幼児の運動能力について．日本発育発達学会第6回大会抄録，72，2008.
- 7) 高原和子，角南良幸，瀧信子：幼児の体力・運動能力と保育環境・内容との関係．九州体育・スポーツ学研究．27，84，2012.
- 8) 瀧信子，高原和子，角南良幸，瀧豊樹：幼児の戸外遊びと運動能力の関係．九州体育・スポーツ学研究，28，145，2013.
- 9) 高原和子，角南良幸，瀧信子：短期間の運動遊びプログラムが幼児の体力・運動能力に及ぼす影響．九州体育・スポーツ学研究，28，147，2013.
- 10) 高原和子，角南良幸，瀧信子：身体活動を取り入れた遊びが幼児の体力・運動能力に及ぼす影響について．福岡女学院大学紀要人間関係学部，15：63-71，2014.
- 11) 高原和子，角南良幸，瀧信子：幼児の身体表現としての運動遊びと体力・運動能力との関係．福岡女学院大学紀要人間関係学部，16：87-97，2015.

## 付記

本論文は、「幼児の身体活動状況と体力・運動能力との関係」として第64回九州体育・スポーツ学会でポスター発表したものを加筆・修正したものである。

本研究は、福岡県春日市教育委員会「平成26年度幼児期の運動促進に関する普及啓発事業」の委託研究の一部である。

ご協力いただいた保育所の子どもたち、保護者の皆様、保育者の先生方に厚く御礼申し上げます。